

樹皮の多様性

森野かずみ



カリンの樹皮



アメリカスズカケノキの樹皮

今月は3日が節分、翌4日は立春を迎え、南向きの日当たりのよい草原ではオオイヌノフグリ・ヒメオドリコソウ・ホトケノザなどを見かけ、春の暖かさが感じられる頃です。

散歩中に感じるのですが、草花の名前を知っている人は意外に多いですが、樹木の名前を知っている人は少ないようです。樹木は高木になると葉や花が高い所につくので、間近に観察できないのが要因のひとつかもしれません。

2月になると、葉が落ちた樹木を公園や街路樹で多く見かけますが、近寄って目にするとうしろの白いのが樹皮です。樹皮の多くはかなり凝った模様で、同じような模様はあるものの、全く同じ模様はありません。樹皮を数多く見ていると、大きく分けて二つのタイプがあるのに気付きます。

一つは一定の面積が剥がれ落ちて模様になるタイプで、カリンやサルスベリなどがあります。もう一つは深い割れ目ができるタイプで、クヌギやマツ、アメリカスズカケノキなど。

樹木は竹と違って、年輪を作りながら外側に向かって幹を太らせ、年輪の一番外側の部分で必要な物質を合成し、細胞分裂しています。その場所が樹皮から少し内側にあるため、幹は年々太くなります。幹の中が太くなると外側の樹皮は引き延ばされ、新しい樹皮を作って古い樹皮を捨てるか、少しのあいだ割れ目を作って時間をしのぐかに分かれます。二つのタイプを使い分けている樹木もあるようです。

寒さが厳しい頃ですが、不思議な樹皮の多様性を間近に楽しみながら、樹木巡りの散歩をお続けください。

※ Kaceeのホームページでカラー写真をご覧いただけます。